

〈特集「ヴォイスとその周辺」〉

[テーマ企画：特集 ヴォイスとその周辺]

まえがき

風間 伸次郎

1. 企画に至った経緯

『語学研究所論集』では、これまでの「受動表現」「アスペクト」「モダリティ」に続き、今回は「ヴォイスとその周辺」という統一テーマを組んで、各言語におけるヴォイス表現の状況を報告していただくということになった。高垣、黒澤、風間が「世話役」となって、この3名で呼びかけ、寄稿のお願い、原稿集めなどを行うことになった。

まず、日本語による19(～25)ほどの例文からなるアンケートを作成し、これに答えていただくことによって、各言語のデータを収集することにした。アンケートの構成や意図については、アンケート本体を参照されたい。アンケート本体は本稿稿末に付録として添付している。

こうして3本の研究ノート、14の言語に関するヴォイス表現のデータが集まった。これは本学にある27専攻語のうちの13言語にリトアニア語、ラトヴィア語、ブルガリア語、キルギス語を加えたものとなっている。

問題点もあるだろうが、統一した例文(意味)に対する各言語の表現を知ることができると、という点で意義のある成果となったのではないかと考えている。

2. 通言語的にみた「ヴォイス」の定義やその意味範囲に関する問題点について

これまでの特集では、各文法カテゴリーの定義やその範囲に関して、先行研究に基づいて概観したが、今回はその余裕がなかった。今回の調査結果も参考に、また機会を改めてヴォイスという文法範疇について考察することとしたい。

3. 本特集で収集した言語とその系統

本特集でデータを収集した言語を語族別に見ると、まずスペイン語、ロシア語、ブルガリア語、リトアニア語、ラトヴィア語、ペルシア語、ウルドゥー語はインド・ヨーロッパ語族の言語である。トルコ語、キルギス語はチュルク諸語、モンゴル語はモンゴル諸語に属するが、これらは(系統ではなく)構造的な類似などの点からアルタイ諸言語としてまとめられることのある言語群である。なおモンゴル語のデータは外モンゴルのハルハ方言と、内モンゴルのホルチン方言からなっている。両者を区別する必要がある時には、それぞれハルハ・モンゴル語、ホルチン・モンゴル語と呼ぶことにする。朝鮮語の系統は不明とされている。マレーシア語はオーストロネシア語族、ラオ語はタイ・カダイ語族、クメール語はオーストロ・アジア語族、中国語とビルマ語は(異論もあるかもしれないが、い

ちおう) シナ・チベット語族, とされている。

4. アンケートの各項目の検討

以下では各言語から得られたデータについて, 筆者が興味深いと思った点や注意すべきであると思った点をアンケートの順序に沿って述べて行くことにする。言語間での類似と相違に関しても若干の考察を加えた。

・【自動詞と他動詞の対立】(1a) 《風などで》ドアが開いた。(1b) (彼が)ドアを開けた。

まず, 自他の対立といっても, 「開く」 / 「開ける」, という一つの自他のペアに限っての観察であるので, それぞれの言語の自他対立の全貌を知るには程遠いものであることに留意しなければならない。このことを踏まえた上で, 以下では各言語の述語の形の上での対立の様相を対照・整理していくことにする。

まず助動詞を用いて分析的に違いを表現する言語には, ペルシア語, ビルマ語, ウルドゥー語があり, 南アジアによった分布を示している。

次に, 総合的な表現になっているものの, 歴史的には再帰代名詞起源の形式を用いて自動詞表現を形成している言語に, ロシア語, ブルガリア語, リトアニア語, ラトヴィア語がある。これらの言語はバルト・スラブ諸語である。他方, 共時的にも再帰形によって自動詞を形成しているのはスペイン語である。

受動もしくはそれに類する接辞によって, 他動詞から自動詞を派生している言語には, 朝鮮語, トルコ語, キルギス語, ホルチン・モンゴル語がある。

逆に, 使役もしくはそれに類する接辞によって, 自動詞から他動詞を派生している言語には, ハルハ・モンゴル語, マレーシア語がある。

上記の他に, ウルドゥー語では, 自他の違いに母音交替が関わっていることが観察される。

自他が同形であるのは, 中国語, クメール語, ラオ語であり, これらの言語は孤立型の言語である。

・【自動詞からの使役, 他動詞からの使役】

(2) 私は(自分の)弟を立たせた。(3) 私は(自分の)弟に歌を歌わせた。

この項目では2つの観点から対照を行う。

第一に, 自動詞からの使役と他動詞からの使役において, 異なった形態的手法を用いるか, 同じ手法を用いるか, またそれはどのような手法か, という点に注目する。なお下記の考察は, この項目についての観察にのみ基づいたものなので, 「立つ」と「歌う」からの使役に限っての考察であることをことわっておかねばならない。他の語彙に対しての使役であれば, 異なった結果が得られる可能性がある。特に使役がより語彙的な性質を示す言

語に関してその可能性は高くなるものと思われる。

まず分析的な表現をとる言語についてみる。

自動詞からの使役でも、他動詞からの使役でも、同じ助動詞を用いている言語には、スペイン語、ロシア語、ラトヴィア語、中国語、朝鮮語、クメール語がある。

他動詞からの場合のみ助動詞を用いる言語には、トルコ語、マレーシア語がある。なおトルコ語の自動詞からの使役では、語彙的に異なった表現が用いられる。

自動詞からと他動詞からとで、別の使役の助動詞を用いる言語には、ペルシア語、リトアニア語がある。

次に、どのような意味の動詞が文法化したのかという点に注目する。むろん言語によって実際の文法化の程度は異なるであろうし、言語によっては語彙的な意味そのままであって文法化していない可能性もあるだろう。しかしここでは便宜上同じ扱いにすることをおことわりしておく。中国語では「呼ぶ、叫ぶ」、朝鮮語では「する、言う」、ペルシア語とトルコ語では「言う」、リトアニア語は「命じる」、クメール語とウルドゥー語では「与える」などの動詞（由来の）表現が用いられている。ラオ語では「告げる」の意の動詞を使うこともできるが、必ずしも必須ではない。したがって使役マーカ―そのものに文法化した動詞が用いられる上記のような言語群とはやや性質が異なっている。

接辞等による総合的な表現による言語には、朝鮮語、モンゴル語、キルギス語、ビルマ語がある。ビルマ語の要素は、「命じる」という意の動詞から文法化したものである。

なおクメール語では、自他ではなく随意・不随意で異なった使役表現をとるといえる。

第二に、被使役主 (causee) のとる格に注目する。日本語では、他動詞からの使役表現の場合、「*私は弟を歌を歌わせた」のように対格が重出するのを避け、「に」が用いられるのだが、他の言語ではどうであろうか。

同じ格をとっていた言語は、ロシア語、ラトヴィア語、ハルハ・モンゴル語で、違う格をとっていた言語は、スペイン語、ペルシア語、リトアニア語、朝鮮語、ホルチン・モンゴル語、トルコ語、キルギス語であった。ただし朝鮮語に関しては、対格の重出も非文ではない。

この項目で注目した点に関しては、特にはっきりした地域的・系統的偏りは見いだせなかった。

・【強制使役と許可使役】

(4a) 《遊びたがっている子供に無理やり》母は子供にパンを買いに行かせた。

(4b) 《遊びに出たがっているのを見て》母は子供を遊びに行かせた。

強制使役と許可使役に関して、同じ表現をとっていたのは、中国語、モンゴル語、キルギス語、クメール語である。さらに同じ使役表現が使用可能であるとされていたのは、朝鮮語、ラオ語、ビルマ語である。

他方、違う表現が現れていたのは、スペイン語、ロシア語、ブルガリア語、リトアニア語、ラトヴィア語、ペルシア語、トルコ語、マレーシア語、ウルドゥー語である。トルコ語とマレーシア語を除くと全部が印欧語族の言語であり、地域的にも系統的にも偏りが見られる。なおウルドゥー語における(4)の表現は、強制か許容かに関して中立であるという。

(4a)で使用した「パンを買いに行かせた」という調査例文は、使役表現を得るための例文としてはやや不適当なものだったかもしれない。なぜなら、ペルシア語、トルコ語では「送る、派遣する」の意の動詞が用いられ、使役表現が現れなかったためである。他にも、朝鮮語では文法化していない「言う」による表現が、キルギス語では同じく「送る」による表現が現れた。

(4b)のトルコ語やペルシア語には、「許可を与える」という表現が現れた。

・【他動詞による表現と使役の違い、直接の行為か間接の行為か】

(5a) 私は弟に服を着せた。(5b) 私は弟にその服を着させた。

日本語ではあまりはっきりした区別がないが、言語によっては、他動詞による表現は直接の行為であり、使役による表現は命令など間接的な指示行為である、というように、二つの表現の働きが異なることがある。

区別がある、とされた言語は、スペイン語、ブルガリア語、リトアニア語、ラトヴィア語、ペルシア語、中国語、朝鮮語、キルギス語、マレーシア語、ウルドゥー語であり、地域や系統によらず広く多くの言語がそうであることがわかる。

一方、区別されないとする言語にはロシア語があり、そこでは他動詞によって間接行為も示せるという。この点に関して、スラブ諸語の内部で差異がみられたことは興味深い。モンゴル語でも同じ表現に訳されたが、調査の時点において二つの文の意図の違いがはっきり通じていたかについては若干疑問が残る。

クメール語とラオ語では、両者の違いは語順、つまり構文の違いとして現れた。(5b)の構成は両言語でよく似ている。ビルマ語でも動詞連続の順序の違いで表現されている。

・【(物の) 授受動詞は恩恵の授受においても助動詞的に使えるか】

【やりもらい、(話者から見ての) 授恩恵と受恩恵の違い】

(6) 私は弟にその本をあげた。

(7a) 私は弟に本を読んであげた。(7b) 兄は私に本を読んでくれた。

まず、日本語のように「やる」(授恩恵)と「くれる」(受恩恵)を区別する言語は皆無であった。古い日本語にもこの区別は無かったとされており、近年の日本語にのみ発達した珍しい区別ということになる(もちろん今後どこかの言語でこうした対立が報告される可能性は十分考えられるが)。

具体的に「物」を授受する際に用いる動詞が、補助動詞などに文法化して、恩恵の授受にも使える、という言語は、中国語、朝鮮語、モンゴル語、キルギス語、クメール語、ラオ語である。中国を中心とした東アジアに偏った分布を示している。同じチュルク諸語でもトルコ語には存在しない。ビルマ語では「見せる」のような要素が用いられる。東北・東南アジアにおける動詞の文法化や補助動詞化には、中国語からの影響が大きく働いているのではないかと想像する。孤立型の言語においては授受動詞が前置詞化する傾向がみられる。

・【テモラウ】(7c) 私は母に髪の毛を切ってもらった。

日本語には「やる」「くれる」のみならず、「もらう」が補助動詞化した恩恵の授受の表現が存在するが、これは世界の諸言語にあって珍しいものと言われている。日本語（共通語）とよく似た朝鮮語やモンゴル語（さらに沖縄中南部方言）ではこうした場合に使役が用いられ、使役の使用範囲が広いことが指摘されている。

今回の調査では、使役を用いる言語として中国語、(朝鮮語)、モンゴル語、トルコ語、キルギス語、ウルドゥー語(語彙的)があげられた。キルギス語では下記で触れる「取る」による自益態が併用されていた。

他方、主語を入れ替えて(この場合では「母」を主語として)、「やる」にあたる授受動詞もしくは他の授受の要素を用いて表現する言語に、朝鮮語、クメール語、ラオ語、ビルマ語がある。

使役以外の表現で動作主との関連を示すものには、「頼んで、～」という表現を用いるペルシア語がある。

・【再帰】

(8a) 私は(自分の)体を洗った。(8b) 私は手を洗った。(8c) 彼は手を洗った。

再帰の表現に関しては、動詞述語の側に何らかの表示を用いて、いわば再帰態を形成する言語(つまり head-marking なタイプ)と、「体」「手」など名詞の方に何らかの再帰の表示を行う言語(dependent-marking なタイプ)、さらには両方に再帰の要素が現れる言語(double marking なタイプ)、どちらにも何の表示もない言語(no marking なタイプ)、の4つが見出される。

まず、head-marking な言語についてみる。head-marking な言語の一部では、身体全体に対しての行為であるか、身体部位に関しての行為であるかによって違いが現れる。

ブルガリア語とリトアニア語では、身体全体に対しても身体部位に対しても再帰の動詞形が現れている。

他方、身体全体にのみ現れる言語は、ロシア語、ラトヴィア語、トルコ語、キルギス語

である。身体部位にのみ再帰的な動詞形が現れるという言語はなかった。バルト諸語もスラブ諸語もこの点に関して言語によって分裂していることが注目される。

動詞の側の表示に関して興味深いのは朝鮮語である。この言語において「洗う」や「髪を梳く」といった意の動詞は本来的に再帰的な行為と捉えられているようで、再帰的な行為として用いられる場合には default な形だが、他者の身体部位などに働きかける場合には使役的な派生形をとらなければならないという。

名詞の方に義務的な再帰表示をもつ言語には、モンゴル語、トルコ語、キルギス語（身体部位の人称を示すことによって再帰を表示する）があり、これらはいずれもアルタイ諸言語である。

クメール語やラオ語、中国語など孤立型の言語は、再帰的行為であるか否かに関しては一般に無関心なようで、もっぱら no marking である。ペルシア語は印欧語族において伝統的な中動相の形式を失っている。

・【自利態】(9) 私は(自分のために)その本を買った。

《自分のために》ある行為を行う場合に特別な表現があるかどうか、について調査しようとした項目である。動詞の方に何らかの表示があればこれを自利態と呼ぶことができるだろう。調査の結果、これが再帰とも深い関連を持っていることがわかった。

まず、はっきりとこれを持つのはキルギス語で、「取る」という動詞が文法化しつつあるものである。(7c)でみたようにこれはやりもらいとも関連を持っている。さらに後述の(13b)のように被害でも用いられるので、話者自身に対して利益にしる被害にしる影響の及ぶことを補助動詞によって表現する形式であるといえよう。なおウルドゥー語でも「取る」を起源とする補助動詞が用いられ、自分のための行為であることを明確化する力があるという。

この他に、リトアニア語では再帰起源の形式が非常によく用いられるという。ブルガリア語とラトヴィア語でも再帰の形式が現れているが、どの程度義務的な要素であるのかはわからない。ロシア語でもその使用が可であるという。

・【相互】(10) 彼らは(／その人たちは)(互いに)殴り合っていた。

動詞(句)の側に何らかの表示があれば、それは相互態、もしくは相互的な動詞形ということになる。

まず、はっきりした相互態を持つといえるのはモンゴル語である。これに準ずるものとして、トルコ語、キルギス語、マレーシア語、ビルマ語があげられる。マレーシア語の形式は、中動体の接頭辞に、複数性または分配を示す接尾辞を加えたものである。ビルマ語は動作主の複数性表示によって相互のニュアンスを示す。

再帰もしくは再帰起源の形式によって相互も表現できる言語には、スペイン語、ロシア

語、ブルガリア語、リトアニア語、ラトヴィア語がある。これらは全て印欧語族の言語である。

他の言語では、(任意の) 副詞(句)によって相互の意味を表現している。

・【衆動】(11) その人たちは《みな一緒に》町へ出発した。

調査の結果、衆動について特別な動詞形を持っている言語は少なく、多くの言語は副詞的表現によって衆動を表現することがわかった。

その中であって、モンゴル語にははっきりとした衆動態がみとめられる。これに準ずるものとして、キルギス語、ラトヴィア語、ビルマ語の動詞形式がある。キルギス語では相互態の接辞が広い機能を示し、衆動にも用いられる。ラトヴィア語では、接頭辞で主体や客体の多数性を示すことができるという。ビルマ語には動作主の複数性を示す助動詞があり、これはそれぞれの主体が行う個別性を示す性質があるという。

この項目の例には現れていないが、トルコ語でも相互の形式が限られた動詞につく場合に複数主体の動作を示す。つまり同系統のキルギス語と似ているが、ただその生産性がきわめて制限されたものとなっている。

・【自発】(12) その映画は泣ける(その映画を見ると泣いてしまう)。

自発に関してははっきりした動詞の形式を持つのはビルマ語で、主語の制御性を制限する「不可避」の助動詞によって自発を表現する。

印欧語の中には、ここでも再帰(起源)の動詞形式によって自発を表現できる言語がある。すなわち、スペイン語(再帰的表現+動詞「飛び出す」の語彙的意味)、ロシア語(願望の助動詞の sja 動詞)、リトアニア語(再帰動詞)、の3つの言語である。

「その映画は泣ける」というこの調査文に関して、「映画」を主語とし、使役や他動詞を用いていわば「映画が泣かせる/泣かす」のように表現する言語が多数あった、すなわちブルガリア語、ペルシア語、リトアニア語、中国語、朝鮮語、モンゴル語、トルコ語、キルギス語、マレーシア語、クメール語である。

日本語は無生物が主語の他動詞文を避ける傾向があるが、日本語とその文法が類似していると言われる朝鮮語とモンゴル語において、ここではそれが許容され現れているのを観察することができる。

日本語と同様に、可能もしくは可能に類する表現を用いる言語にはラトヴィア語、トルコ語がある。トルコ語の形式は受動とラベルされているが、可能の意味も広く示すことのできる形式である。

モンゴル語のように、一種の完了形を用いて、「(泣いて) しまう」のように表現する言語もある。

ウルドゥー語では「涙が来る」のように表現するという。感情述語の諸表現において、

このような表現をとる言語の分布が注目される。今後の研究が期待される。

・【意志／無意志】

(13a) 私は卵を割った。(13b) 《うっかり落として》私はコップを割ってしまった。

意志／無意志の対立に関して、印欧語や東北アジアの言語は一般に無関心で、任意の副詞表現による言語が多い。これに対して、東南アジアの言語はこの対立に対してかなり敏感であるようだ。

はっきりした偶発・自発的行為の形式 (ter-) を持つのはマレーシア語である。大陸部の孤立型言語では語彙的に区別している (クメール語、ラオ語 (無意志の方には使役形式が現れる))。これらの言語ではこの対立は自他の対立として捉えられていることが多いようだ。ビルマ語にも自動詞を含む何種類かの表現方法がある。東南アジアの言語ではないが、ウルドゥー語でも無意志の方には自動詞が用いられる。

印欧語やアルタイ諸言語では、副詞の他、本来意志／無意志以外を示す形式によってこのニュアンスを表現しようとしているものがある。

モンゴル語では(12)と同じように完了の形式が用いられる。キルギス語では使役と被害 (自利態で触れた「取る」由来の形式) の組み合わせを用いている。

スペイン語では再帰表現を用いている。

ラトヴィア語ではこの場合語彙の違いで表現できるが、バルト・スラブの言語もやはり基本的にこの違いには無関心である。

中国語では「卵」の方においてのみ、「把」構文の方が無意志を示すという。この理由は良く理解できない。

朝鮮語では、無意志の方に一種の強調形が現れる。これは結果の状態を意識して用いられるのだろうか？

・【随意の不可能と不随意の不可能】

(14a) きう私はコーヒーを飲みすぎて(飲みすぎたので)眠れなかった。

(14b) きう私は仕事がたくさんあって(たくさんあったので)眠れなかった。

違いが観察されるのは、ラトヴィア語、トルコ語、中国語、クメール語、ラオ語、である。ラトヴィア語以外のバルト・スラブの言語では、どちらにも区別なく状況可能の形式が用いられる。

やはり東南アジア大陸部の孤立型言語において、意志的な行為とその結果がどうなるか、という2つの事象は分離されて動詞連続によって表現され、「寝たが眠れなかった」という事態と「横になることができなかった」とおいう事態とが区別される。

しかし、その近隣の言語であるビルマ語、マレーシア語には区別がないという。

・【全体と部分・主体・一時的】(15) 私は頭が痛い。

所有構造における「頭」が主語となって、「私の頭が痛い」のように表現する言語は、ペルシア語、モンゴル語、トルコ語、キルギス語、マレーシア語、がある。

これに対し、日本語と同様に、一種の二重主語型の構文が観察されるのは、ペルシア語、中国語、朝鮮語、マレーシア語、クメール語である。これは「私の頭が痛い」型から、「私」が主題として取り出されたものとみることも可能かもしれない。キルギス語では両方のタイプの文が可能であるという（ただし動詞の主語表示は3人称となる）。ペルシア語では二重主語構文が許されるが、接辞によって所有者の人称を表示する必要がある。それ以外の言語は孤立語であるか、日本語同様に「超格」ともいうべき主題の助詞を持っている言語（朝鮮語）である。単に「頭痛い」と表現するのは、ラオ語とビルマ語であるが、二重主語も可能であるという。

感覚主体を与格にとり、「頭」を主語とした与格構文によって表現する言語には、スペイン語、ロシア語（ただし与格でなく前置詞＋属格）、リトアニア語、ラトヴィア語、ウルドゥー語（ただし「頭」でなく「頭痛」が主語）がある。

さらに上記とは異なる表現をとる言語には、ブルガリア語：「頭が私を痛めつける」もしくは英語のように「頭痛を持っている」と表現するブルガリア語、「私の頭の中に痛みがある」のような表現をとるウルドゥー語がある。ここでもウルドゥー語が(12)の「涙」やこの「痛み」のように〈現象〉を主語にすることが注目される。

・【全体と部分・主体・恒常的】(16) あの女性は髪が長い。

ここで二重主語文をとるのは、ペルシア語、中国語、朝鮮語、クメール語、ビルマ語であり、(15)と比べると、マレーシア語とビルマ語が入れ替わった形になっている。(15)で二重主語文が可能であったラオ語はここでは存在文を用いている。

「あの女性の髪は長い」のように表現するのは、ペルシア語、リトアニア語、モンゴル語、トルコ語、ウルドゥー語である。

「あの女性には長い髪がある」のような存在文の表現をとるのは、ロシア語、ラトヴィア語、トルコ語、キルギス語、クメール語、ラオ語、である。ただしトルコ語とキルギス語の存在文では、「女性」が属格を取ることに注意しておく必要がある。

他方、「持つ」という動詞によって表現するのは、スペイン語、ブルガリア語、リトアニア語で、いずれもヨーロッパの印欧語である。

しかし上記のように印欧語の中でも表現は分かれている。この種の表現では系統よりも地域的影響の方が強く働いているように感じる。

さらに「～持ちの」のような意の特別な接辞などを持っていて、「女性」を主語とした「長い髪持ち(だ)」のような表現ができる言語があるが、これはトルコ語とマレーシア語(ber-動詞による)である。リトアニア語でも with のような前置詞によってこの類の表現が可

能である。今回の調査では現れなかったが、モンゴル語にもこうした表現がある。

朝鮮語では日本語同様、「長い髪をしている」のような表現をとっている。

リトアニア語では「あの女性のは長い髪」のような表現も可能であるという。

・【全体と部分・対象・接触／結果状態が継続的】

(17a) 彼は(別の)彼の肩を叩いた。(17b) 彼は(別の)彼の手をつかんだ。

他人の身体部位などに働きかける表現では、日本語のように「彼の肩を叩いた」のように所有構造の名詞を項として表現するタイプと、英語などのように「彼を肩において叩いた」式に、対象となる人物全体を直接項とし、身体部位はそれとは切り離して表現するタイプの2種類がある。ここでは前者を一括支配型、後者を分割支配型、と呼ぶことにする。

すると、一括支配型の言語は、ペルシア語(ただし名詞の人称標示あり)、中国語、朝鮮語、モンゴル語、トルコ語、キルギス語、マレーシア語、クメール語、ラオ語、ビルマ語、ウルドゥー語と多数を占めることがわかる。

他方、分割支配型の言語は、スペイン語、ロシア語、ブルガリア語、リトアニア語、で、全てヨーロッパの印欧語であることがわかる。

ただしラトヴィア語では両方可能であり、またトルコ語やキルギス語には奪格を用いた表現がある。すなわち、トルコ語もキルギス語も「つかむ」のような意の動詞においては「彼{の/を}手からつかむ」のような表現が可能であるという。

・【知覚構文】

(18a) 私は彼がやって来るのを見た。(18b) 私は彼が今日来ることを知っている。

知覚構文では、ある人物の行為を他の人物が知覚することを表現するのであるから、それが示すできごと自体は「複合的」なものということができよう。しかし知覚表現の場合、他の表現とは若干事情が異なり、単なる複文とはならないケースが多くみられるようだ。例えば英語で to 無し不定詞が現れるように、単文の構造に近いような独特の構文が現れることが考えられる。したがってここでは単文的表現、複文的表現という用語を用いて対照・分類を行うことにする。

単文的表現の言語には、スペイン語とウルドゥー語がある。これらの言語において、(18a)では動作主が対格で現れ、(18b)とは異なった構文になっている。

単文的な表現と複文的な表現の両方が可能であるという言語には、ブルガリア語、ペルシア語、リトアニア語(ただし単文的なものは現在ではまれ)、ラトヴィア語がある。

上記は全て印欧語族の言語であり、このような言語の数はさほど多くないことがわかる。

他方、複文的表現の言語は、ロシア語、リトアニア語、中国語、朝鮮語、モンゴル語、トルコ語、キルギス語、マレーシア語、クメール語、ラオ語、ビルマ語、である。

なおロシア語とリトアニア語では、(18a)の場合には how にあたる語が用いられる。

アルタイ諸言語，すなわち，モンゴル語，トルコ語，キルギス語では従属節中に斜格主語が用いられる（ハルハ・モンゴル語では対格，ホルチン・モンゴル語，トルコ語，キルギス語では属格の斜格主語が現れている，ただしキルギス語では主格も可であるという）。形動詞に直接格がついて文が構成されている点において，ほぼ完全な文と文を関係詞などによって繋いで複文を構成しているタイプの言語より，少し単文に近い性格を示していると言することができるだろう。ただこれは知覚構文に限っての話ではなく，(18a)(18b)の両方に観察される特徴である。

クメール語とラオ語では，(18a)の知覚構文の方には補文標識がなく，(18b)「知る」の内容には補文標識がある，という点で両表現は若干異なっている。ビルマ語でも「言う」の文法化した要素が(18b)に現れている。中国語では(18a)(18b)ともにこうした要素を示していない。

孤立型の言語では，何の要素も用いずに文を目的語化して，これらの表現を形成している点が注目される。

・【引用文中の再帰】(19) 彼は自分(のほう)が勝つと思った。

引用文中の再帰に対して，①再帰代名詞を主格で使う言語，②再帰代名詞を対格で使う言語，③三人称の代名詞を使う言語，④（動詞の人称変化などのみで）どちらの代名詞も用いない言語，⑤完全な直接話法により，一人称の代名詞が現れる言語，が観察された。これらを順にみていく。

まず明示的に再帰代名詞を使用するのは，中国語，朝鮮語，モンゴル語，トルコ語，マレーシア語，クメール語，ラオ語であった。

このうち，対格を用いるのはモンゴル語とトルコ語であった。ただしトルコ語ではふつうの補文による表現も可能である。

他方，明示的に三人称代名詞を用いるのはウルドゥー語である。

代名詞を使わないのは，ロシア語，ブルガリア語，ペルシア語，リトアニア語，ラトヴィア語，である。述語に人称変化のある印欧語族の言語が並んでいる。

完全な直接話法により，一人称代名詞を用いて表現できるのはキルギス語のみであった。ただし再帰代名詞による表現も可能であるという。

・【部分的に及ぶ動作と全体に及ぶ動作】

(20a) 私は(コップの)水(の一部)を飲んだ。(20b) 私は(コップの)水を全部飲んだ。

部分的に及ぶ動作に対して，何らかの文法化した表現要素が存在するか，ということ調べるのがこの項目の狙いである。

まず，リトアニア語には広く部分属格が存在するという。アスペクトや否定などの条件によっても現れるので，フィン・ウゴル語にある（部）分格によく似ている。これに次ぐ

のがロシア語で、一定の語彙や文法の条件下でのみ部分属格が生ずる。

ブルガリア語では、アスペクトの違いが両表現の違いを示すのに役立っている。ラトヴィア語では接頭辞の示すアクツィオンスアルト(?)が関わっている。

上記に示したような部分に関心のある言語は、全てバルト・スラブの言語である。

スペイン語には、フランス語やイタリア語のような部分冠詞はないが、指示形容詞に de を前置することによって部分を示すことができるという。

トルコ語、キルギス語には部分を示す奪格の用法がある。モンゴル語にもやはり部分を示す奪格の用法があり、ホルチン・モンゴル語の方の文にこれが現れている。

他方ウルドゥー語では、「もらう」の意の動詞を補助動詞に用いることによって、「全部」の意を明示することができるという。

これ以外の言語、すなわちペルシア語、中国語、朝鮮語、マレーシア語、クメール語、ラオ語、ビルマ語では、特に文法化した要素は観察されず、「～のうちの部分」のような語彙的・分析的表現によるか、副詞を用いて表現していた。

・【恒常的な否定文】(21) あの人肉を食べない。

(20)の項目ですでに述べたとおり、リトアニア語では否定文においては常に目的語が属格になるという。これに対しロシア語では、この恒常的な否定文においても、必ずしも否定属格を用いなくともよく、対格も用いられるという。ラトヴィア語では対格である。

トルコ語、モンゴル語には恒常性を示す動詞の屈折形式がある。なおトルコ語の恒常性の否定の形式は、否定と恒常性の2つの部分には分析できない。

ビルマ語には習慣・傾向を示す助動詞がある。

上記以外の言語には、特に特記すべき情報は見いだせなかった。

・【感覚述語・非人称文／感覚主体の存在が感じられない、より客観的な表現】

(22a) 今日は寒い。

動詞が人称変化を行う言語の中には、それらの言語で「非人称文」と呼ばれる構文が現れる言語がある。

これはまずロシア語とブルガリア語に見られる。リトアニア語とラトヴィア語でも非人称文となるが、非人称動詞によるものと、形容詞によるものがある(なお形容詞はリトアニア語では中性形、ラトヴィア語では男性形となっている)。

他の言語はもっぱら単に形容詞を述語とする文で表現される。

・【感覚述語・非人称文／斜格主語】

(22b) 私は(何だか)寒い(私には寒く感じる)。

まず感覚主体をどう表現するかに注目する。

日本語のように主格が使える言語には、中国語、朝鮮語、マレーシア語（ただし「感じる」という述語も用いられる、被害を示す接周辞も用いられる）、クメール語、ラオ語（ただし「感じる」という述語も用いられる）、ビルマ語（ただし“stay”の意の助動詞とともに）がある。

他方、感覚主体を与格にし、与格主語構文を取る言語には、ロシア語、リトアニア語、ウルドゥー語がある。感情・感覚表現が与格構文をとるのは、インド的な言語特徴の一つであると言われるが、やはりここにウルドゥー語が現れている。ブルガリア語もこの項目の文では与格主語が現れているが、動詞によっては対格主語も起こり得るという。

もっとも興味深いのはペルシア語で、形容詞に感覚主体を示す人称接辞がつき、コンピュータは3人称となる。これも一種の非人称文であるという。

次に述語の方に注目する。「感じる」という動詞を用いている言語には、中国語、モンゴル語、キルギス語、ウルドゥー語、がある。

他方、「凍える、（人間が）寒くなる」という意の動詞を用いる言語があり、これにはモンゴル語、トルコ語がある。

・【(感情主体が受動的である)感情述語】(23) 私は人がとても多いのに驚いた。

感情述語の中には、「怒る」のように感情主体が対象に積極的に働きかけるタイプの感情もあれば、「怖い」や「驚く」のように対象のほうがかむしろ感情主体に働きかけてきて、感情主体にある感情が引き起こされるタイプのものもある。この項目が対象とするのはこのうちの後者の方である。

まず感情主体の表現の仕方についてみる。

対象の方を主語とし、感情主体は対格で表現する言語、つまり「人の多さが私を驚かした」のように表現する言語は、ラトヴィア語のみであった。ただしこれを受け身にして「私」を主語とする文によって表現することも可能であるという。ロシア語では再帰的な動詞形（*sja* 動詞）が現れている。

感情主体が主格でも与格でも可であるのは、リトアニア語である。

これ以外の言語では、この「驚く」という述語においては、感情主体はもっぱら主格によって表現されていた。

次に、感情主体が主格で表現される言語では、感情を引き起こす対象の方がどのようになるのか、という点に注目してみよう。

「(人の多さ) で (驚く)」のように道具(格)が現れる言語に、モンゴル語、クメール語がある。「(人の多さ) に (驚く)」のように、与格が現れる言語には、朝鮮語、トルコ語、キルギス語がある。同様に、マレーシア語では *with* のグロスで示される要素、ラトヴィア語では *about* のグロスで示される要素に拠っている。格の発達したアルタイ諸言語がここには多く現れている。

これに対し、「人が多い」ということを一つのできごととして捉え、複文によって表現している言語には、ロシア語、ブルガリア語、ペルシア語、リトアニア語、ウルドゥー語、ラオ語があった。これらの言語の多くは、定形動詞による表現を好む印欧語族の言語であることがわかる。

中国語とビルマ語では、等位接続による表現が用いられている。

・【現象文・現場での直接体験】(24) 雨が降ってきた。

この項目に関して最も特徴的なのは中国語である。中国語ではこのような現象文においては、動作者が動詞の後に現れる。これは動詞の前の位置が「主題」としての機能を強く示すため、全体が新情報であるような現象文においては、動詞の前の位置を空けなければならないためであると考えられる。topic-orientedな言語であるといわれる中国語の性質の一つの現れであるともいえる。

筆者は、東南アジアの孤立型の言語群においても、こうした語順の文が現れるのではないかと思っていたのだが、予想に反してこのような語順を示す孤立型の言語は無かった。

全体が新情報であるために、日本語のように「ハ」と「ガ」の対立がある言語では、このような場合に「ガ」しか現れない。朝鮮語にも同様の対立があるが、やはりここでは「ガ」に対応する -ka が現れている。

他の言語には格や動詞形態に関して特筆すべき点は見られなかった。

「雨が降る」という表現には、3つの型がある。すなわち、①日本語のように名詞の方に「雨」の意があり、動詞の方には「雨」の意の無い何らかの動詞を使う言語、②英語の It rains. のように動詞の方に「雨降る」の意があって、名詞の方には「雨」の意がないか、そもそも名詞を用いない言語、③名詞にも動詞にも「雨」の意があり、言語によってはさらには両者が派生関係にあるもの、の3つである。この点にも注目して対照してみよう。

まず、名詞「雨」型のものには次のような言語があった。なお()内は今回の調査文に現れた動詞の意味である。すなわち、ロシア語(「行く」)、ペルシア語(「始める」)、中国語(「降る」)、マレーシア語(「降る」)、朝鮮語(「来る」)、クメール語、モンゴル語(「入る」)、ウルドゥー語(「ある」)、であった。

動詞「雨降る」型の言語は、リトアニア語で、名詞は現れていなかった。

名詞動詞両方「雨」型の言語には、ブルガリア語、ラトヴィア語、ビルマ語があった。トルコ語およびキルギス語では、「降る」という動詞のほうから「雨」にあたる語が派生している。

アスペクトに関する注目すべき項目であるが、今回のテーマではないので、ここではこれについては触れないことにする。

・【中間構文】(25) その本は良く売れる。

いわゆる中間構文に関しては、再帰動詞化や自動詞化を行って動詞がとれる項を減少させるタイプの言語と、他動詞をそのまま使えるタイプの言語があることがわかった。

まず再帰動詞を用いる言語には、ロシア語、ブルガリア語がある。ラトヴィア語にもあるが、ロシア語からの影響であるとされている。

「良く買われている」のような意の受動文を用いるのは、リトアニア語である。三人称複数を主語にした一種の不定主語文を用いるのは、ラトヴィア語である。

他動詞の自動詞化 (anticausative) による言語は、朝鮮語、ハルハ・モンゴル語、キルギス語、マレーシア語 (形容詞の後に用いる) である。なお自動詞化としたが、受身との境界は明確でない言語が多い。

次に、他動詞をそのまま使えるタイプの言語についてみるが、これもさらに大きく2種類に分かれる。すなわち、「ナイフ (がよく切れる)」など、意味役割が道具である場合には、それをそのまま主語にして他動詞文で表わせるが、「本」のように意味役割が動作の対象である場合にはできない、という言語が比較的多く存在するようだ。このような言語には、ペルシア語、リトアニア語、マレーシア語、ウルドゥー語がある。

これに対し、「本」のような動作の対象でも問題なく他動詞の主語にとれる言語は、トルコ語 (述語は恒常/現在)、ラオ語、クメール語、ビルマ語である。

中国語では、形容詞を用いて「本」の性質として述べるか、行為の結果として述べるという。

5. 今後の課題

以上、アンケートの各項目に関しての検討を行った。ここで、さらに全体のまとめと整理を行いたいが、筆者には残念ながら現在その時間と能力が不足している。データについても、アフリカや北米・中南米の言語、オーストラリア先住民の言語のデータが無く、類型論的なまとめを行うには時期尚早である面も認められる。

今回の調査で得られた例文は、話者が直感的に最初に思いついた文である、ということで、それなりの価値はあると思う。しかし、媒介言語である日本語に引きずられた可能性も無いとは言えないだろう。パロールの次元での個人差も存在するに違いない。また他の構文が不可能であるのかどうかについての十分な検討も行われていない。以上のような点についても留意しておく必要がある。

やはり言語研究をする際には、その研究者の母語や知っている言語が色眼鏡になってしまう。視野を広げ、通言語的に意味のある事実を見出していかなければならないと感じている。

今回観察されたものとして前節に整理した対照言語学的な考察のうちには、すでに先行研究において指摘されているものもあろう。個々の問題点に関して、特化した先行研究を

よく読み、すでに指摘のあるものについて先行研究の言説を示すべきであったが、これもできていない。

おおよそ上記のような点を今後の課題として記しておく。

末筆ながら、興味深く貴重なデータをお寄せくださった諸先生方に深く感謝申し上げたい。アンケートの作成をはじめとするさまざまな場面で貴重なアドバイスを下さった語学研究所所員の諸先生に特にお礼申し述べたい。特に菅原先生にはアンケートの作成にあたって貴重な助言を多く賜った。深く感謝の意を表したい。

付録：アンケート

語研論集特集へのご協力をお願い

高垣敏博，黒澤直俊，風間伸次郎

語研論集の特集について、このほど、高垣，黒澤，風間の三者で相談し、以下のような大枠で「ヴォイスとその周辺」に関する原稿作成あるいは言語データ提供をお願いすることになりました。

ヴォイスに関しては、すでに14号で「受動表現」についての特集を組みましたが、その時は受動表現だけでしたので、今回はより広い意味でのヴォイスを対象としました。ヴォイスの定義やその範囲も研究者によって異なっており、最も狭い定義では能動と受動の対立のみをヴォイスとする考え方もあるそうですが、今回は、使役、再帰、自発、自他、やりもらい (benefactive)、所有者繰上げ (?) など、格の交替等に関わる現象を広く取り上げることを目指しました。なおアンケート作成に当たっては、菅原先生より貴重なアドバイスもいただきました。

特集の趣旨は、自由な（したがって通常は相互に関連のない）投稿原稿ばかりではなく、「語研論集ならでは」というコンテンツを考えてみようということ。特集の個々の寄稿は論文でも研究ノートでも結構です。また、論文・研究ノートを書く余裕がないという場合には、下のようなアンケートに答える形で言語データ提供にご協力いただければと思います。アンケートについては、回答が重複してもいけませんので特集担当者と調整していただくこととなりますが、共通のテーマに関して、さまざまな言語における状況をまずは並べて見てみることから始めたいと考えています。

なおデータ提供の（第一次）締め切りは、11月末（11/30）とさせていただきます。

I. 以下のアンケートにご協力ください。

以下の例文に対応する内容は、その言語ではどのように表現されるか？

[]内は、その例文を訊く狙い等のコメントです。なお、これらのアンケートの文（の意味内容）に対して、いくつかの動詞形（さらには副詞など、別の品詞による形）が対応する場合、それも書いていただければありがたいです。もしその形式間に意味やニュアンスの違いがあるようでしたら、それについても解説いただけるとさいわいです。《 》内は、状況説明の部分であり、翻訳してもらう必要はありません。

(1a) 《風などで》ドアが開いた。

[[自動詞による表現]. 自他は形態的に同形か？ それとも形の上ではっきり区別するか？ 語彙による違いも大きいと考えられますので、「開く／開ける」以外の動詞も含め、その個々の言語一般における自他の違いの形態的な現れ方について、若干でも情報をいただけると幸いです。なお、【 】内は、日本語の表現についての文法的なラベルです。調査する言語ではもちろん違った表現になる可能性が予測されます。あくまでも例文の意味する意味内容に対応する当該言語の表現を調べていただければありがたいです。]

(1b) (彼が)ドアを開けた。

[[他動詞による表現].]

(1c) 入口のドアが開けられた。

[[他動詞の受け身]. (1a)の自動詞による表現との(日本語での)意味的な違いは、他の言語ではどのようにして表現されるのだろうか？ なおこの日本語では少し不自然な気もする。「ドアが壊れた／ドアが壊された」など、別の動詞での状況はどうか？]

(2) 私は(自分の)弟を立たせた。

[[自動詞の使役]. 被使役主(Causee)にはどんな格が可能か？ 例えば日本語では対格だが、いちおう与格も可能である。なお、当該言語の記述文法では何が使役とされているか？、その「使役」と他動詞化との境界は明確か？、などの点についても御教示いただければ幸いです。]

(3) 私は(自分の)弟に歌を歌わせた。

[[他動詞の使役]. 対格の重複を嫌って別の格が現れるか否か。可能なパターンはできるだけ多くあげていただけると助かります。]

(4a) 《遊びたがっている子供に無理やり》母は子供にパンを買いに行かせた。

[[強制使役]. 次の許可使役と表現に差異はあるか？]

(4b) 《遊びに出たがっているのを見て》母は子供を遊びに行かせた。

[[許可使役].]

(5a) 私は弟に服を着せた。

[[他動詞による表現]. これに対応する当該言語の表現は、直接手を下して着せることを含意するか？]

(5b) 私は弟にその服を着させた。

[[自動詞の使役]. これに対応する当該言語の表現は、言語による命令など、間接的な行為であることを排他的に含意するか？ もしくは表現自体がそのような表現であるか？ (4a)と(4b)は同じ表現でしか表現できず、日本語におけるような意味の違いは文脈でしか判断できない言語も存在すると考えられる.]

(6) 私は弟にその本をあげた。

[[授受動詞文]. 次のやりもらい表現との関連を見るために必要な文. 授受動詞文自体の格枠組み等に関しても、通言語的なデータの集積が望まれる.]

(7a) 私は弟に本を読んであげた。

[[やりもらい・授恩恵・順向]. ここでバントウの言語やグルジア語のような applicative が現れる言語もある程度存在するものと考えられる.]

(7b) 兄は私に本を読んでくれた。

[[やりもらい・授恩恵・逆向]. (6a)と同じ動詞による同じ表現になる言語も多いと思われるが、それを確認することも重要だろう.]

(7c) 私は母に髪の毛を切ってもらった。

[[やりもらい・受恩恵]. モンゴル語や朝鮮語など、ここで使役表現が用いられる言語も多く存在するものと思われる.]

(8a) 私は(自分の)体を洗った。

[[再帰・1人称・自身の全体が対象]. 古典語であれば中動相が用いられる表現。(語彙的な)目的語なしで、つまり動詞の側のヴォイスの転換のみで「自分の体を洗う」にあたる表現が可能な言語の存在が考えられる.]

(8b) 私は手を洗った。

[[再帰・1人称・自身の部分が対象]. ロシア語のように、もはや人称によって再帰代名詞由来の部分は変化しなくなっている言語もあるだろう.]

(8c) 彼は(／その人は)手を洗った。

[[再帰・3人称・自身の部分が対象].]

- (9) 私は(自分のために)その本を買った。
 【【自行自利態, 目的語をとる再帰的表現】. 補助動詞に「とる」の意の動詞を用いる言語がある. 】
- (10) 彼らは(／その人たちは)(互いに)殴り合っていた。
 【【相互】. 言語によって代名詞の方で表現するか, 動詞のほうで表現するか, などの違いが出るのが予想される. 】
- (11) その人たちは《みな一緒に》町へ出発した。
 【【衆動】. これについて独自の動詞接辞を用いる言語もある. 】
- (12) その映画は泣ける(その映画を見ると泣いてしまう)。
 【【自発】. 】
- (13a) 私は卵を割った。
 【【意志的な動作】. 意志無意志が動詞の自他と密接な関係にある言語が多く存在する. 】
- (13b) 《うっかり落として》私はコップを割った(／割ってしまった)。
 【【無意志的な動作】. 】
- (14a) きう私はコーヒーを飲みすぎて(飲みすぎたので)眠れなかった。
 【【不可能・不随意】. 可能に関しては, 前回のモダリティで調査したが, (より頻度の高い)不可能の文を調査していなかった. 随意／不随意の違いも, 特に東南アジアの言語などで大きな違いとして現れるという. 】
- (14b) きう私は仕事がたくさんあって(たくさんあったので)眠れなかった。
 【【不可能・随意】. 】
- (15) 私は頭が痛い。
 【【全体と部分・主体・一時的】. 日本語では一種の二重主語構文となる. 言語によって, 所有関係が文中でどのように処理されるかが興味深い. 何種類かの構文が可能である場合, それについてもぜひ御教示いただければ幸いです. 】
- (16) あの女性は髪が長い。
 【【全体と部分・主体・恒常的】. 「あの女性は長い髪持ちだ」のような表現をとる言語もある.

日本語にも「あの女性は長い髪をしている」のような表現がある。]

(17a) 彼は(別の)彼の肩を叩いた。

[[【全体と部分・対象・接触】. ここでも多くの言語で独特の構文が現れる。]

(17b) 彼は(別の)彼の手をつかんだ。

[[【全体と部分・対象・結果状態は継続的】.]

(18a) 私は彼がやって来るのを見た。

[[【知覚構文】. 英語では to 無し不定詞が現れるが他の言語ではどのような構文になるだろうか？]

(18b) 私は彼が今日来ることを知っている。

[[【補文による表現】. 上記(a)の知覚構文が、普通の補文による表現とは違っているかを確認するための質問事項。]

(19) 彼は自分(のほう)が勝つと思った。

[[【引用文中の再帰】. 「自分を勝つと思った」のように対格が出る言語の存在も予想される。]

II. 論文・研究ノートをご執筆いただける場合は次の2点を可能な限りご考慮ください。

1. 上記のアンケートで取り上げられているような「ヴォイス（とその周辺表現：以下では略）」を表すにはどのような（形態的、語彙的など）表現があり、それはどのような（形態的、語彙的、意味的な）表現をとるのか？ 文法化されている場合には、どのようなパラダイムをなしているか、形式と共にあげていただけるとありがたいです。ヴォイスの体系、パラダイムについてもあげていただければありがたいです。
2. 「ヴォイス」と他の（文法）カテゴリーとの関係はどのようになっているか。例えばアスペクト（/アクツィオンスアールト）、などとの関係はどのようになっているか。
3. 「ヴォイス」の体系全体に関して、その言語で定説とされているのはどのようなことか？ 代表的な先行研究にどのようなものがあるか？その内容は大筋どのようなこと

か？ 典型的にみて、その言語のヴォイスにおいて特徴的なのはどのような点か？

(データ提供のみの方でも、論文・研究ノート執筆の方でも) さらに以下のような表現についても調査／研究していただけるとありがたいです。

(20a) 私は(コップの)水(の一部)を飲んだ。

[[部分的に及ぶ動作]. フランス語で部分冠詞, ロシア語で生格が出るが, 他の言語ではどのような表現になるか? トルコ語, モンゴル語など奪格が出る言語もある.]

(20b) 私は(コップの)水を全部飲んだ。

[[全体に及ぶ動作].]

(21) あの人(は)肉を食(べ)ない。

[[恒常的な否定文]. フランス語で部分冠詞, ロシア語で否定生格が現れる.]

(22a) 今日は寒(い)い。

[[感覚述語・非人称文／感覚主体の存在が感じられない, より客観的な表現].]

(22b) 私は(何だか)寒(い)い(私には寒く感じる)。

[[感覚述語・非人称文／斜格主語]. 「眠い。」と「《眠りたいが仕事などで眠れないので》眠りたい」のような違いなども, 違う表現などが用意されていればぜひ御教示下さい.]

(23) 私は人(が)と(て)も多(い)いのに驚(い)いた。

[[感情述語].]

(24) 雨(が)降(り)って(き)た。

[[現象文・現場での直接体験].]

(25) その本(は)良(く)売(れ)る。

[[中間構文]. 「このナイフは良く切れる」のような道具主語構文も興味深い.]